

「必要悪」を必要としない世界の実現のために

医療福祉ライター 今村美都さんから

明日は7時台の新幹線に乗って、関西方面へ行かねばならず、ゆきさんへの感想はまた明日にでもと思いつつ、いったん、ベッドに入ったものの、奥歯が痛くて、ああ、奥歯を噛み締め過ぎていたのだなと気が付いて、また起き上がってきて、結局、書いています。

滝山病院は、氷山の一角、ですね？

全国に程度の差はあれ、数多の「滝山病院」が恐らく、まだまだ、存在する。

院長は筋金入りに思われるのでひとまず傍におくにしても、このドキュメンタリーに出てくる看護師たちは、異常に思えます。けれど、人を鬼にするのは恐らく環境です。

残虐さを垂れ流しにしてよい環境では、人間の持つ残虐性のほうをスタンダードにすることに抵抗がなくなる人間は少なくない。

彼らだって、愛にあふれる、一人ひとりの尊厳を大切にする医療現場に置かれれば、ナイチンゲール顔向けのケアを提供する看護師にだってなりうるかもしれない。

だからこそ、私は「必要悪」という言い訳が、やはり好きにはなれません。

たとえキレイゴトと言われようと、理想論と言われようと、悪を必要としない世界はきっとつくれるはずなのに、という思いがふつつとわいてきてしまう。

心がポッキリ折れそうな「現実」を前に打ちしがれているだけでは、「必要悪」を必要としない世界の実現には程遠い。

では、何ができるのだろうか？

知らないだけで、実は私たちのすぐ身近にある精神医療の闇にカメラの光を当て、明るみに出しているこのドキュメンタリーに、さまざまな思いを駆け巡らせています。